

八ノ一 宗性上人著作 その一（弥勒如来感応抄奥書）

出典 弥勒如来感応抄（東大寺蔵）

解説

宗性は建仁二年（一一〇二年）に宮内権大輔藤原隆兼を父として生まれ、建保二年（一二二四年）、十三歳で東大寺に入寺、華嚴宗の専攻門跡院である尊勝院で修学した。ここで尊勝院主の道性（九条兼良の息）・光暁等に華嚴を、聖禪・良忠等に俱舎・因明・唯識等をそれぞれ学び、延暦寺や円城寺にも足を運んで研究を重ねた。

宗性は貞慶の徳を慕い、寛喜二年（一一三〇年）七月、二十八歳で笠置寺に入山、ここ笠置寺でますます弥勒に篤く帰依し、日夜、貞慶の著作を研究して弥勒への信仰を深めていった。

宗性の代表的著作である弥勒如来感応抄は五冊からなる大作で、第一冊は「弥勒講式」など貞慶の著作を中心とする資料を収め、第二〜五冊は「大唐西域記」「法顕伝」「法苑珠林」「大宋高僧伝」「大日本法華経験記」「聖徳太子伝暦」「弘法大師伝」「入唐求法巡礼行記」などから抄録した資料を収める（国史大辞典による）。

宗性はこの著作のため、弥勒の「絵像を懸かけ、弥勒を眼前において清浄信力を運び、心底に於いて兜率往生を遂げんが為、三会の引撰に預からんが為、此の勤を致」したという（弥勒如来感応指示抄他奥書）。

宗性は他にも膨大な著作にそれぞれ奥書を残している。弥勒信仰にたいする心情がほとばしりदैている弥勒如来感応抄の奥書は、宗性の笠置寺入山の時期、宗性による十三重塔の修復、笠置寺各坊の名称など、貞慶亡き後、元弘の役までの間における笠置寺の様子を提供する貴重な史料でもある。

以下シリーズで記載していく。第一奥書には宗性の笠置寺入山の経緯が記されている。

弥勒如来感応抄第一奥書

原文

文暦二年二月八日酉時於笠置寺東谷房抄之畢、

抑宗性自去寛喜二年之秋不図參籠此靈地以降深馮
慈尊之引接偏樂兜卒之往生之間常卜当山幽閑之居
專祈後世得脱之旨其中去年青陽之始当山居住之時
懇發檢訪經論伝記章疏之説抄出弥勒如来感応之文
之願兼以祖師上人御製作為本弥勒讚嘆之私記兜卒
業因之略抄等広写諸本欲録一帖之处同二月十四日
之朝惡党数輩乱入一山破損房舎殺害住侶畢爰宗性
眼前見彼惡行懷中持此双紙先陵東山暫息楊生之里

後赴南都再還華嚴之室其後当山稍不静去年空過之
而今器界漸復其本住侶多集此処之間重抽慙懃之誠
亦勵抄出之勤今此一帖抄所結集訖也此中觀兜卒記
之外皆是祖師上人御草案也每拜見信仰之淚浮眼每
誦誦隨喜之思銘肝實是末代之要書後學之重宝者歟
志之所之不可不集仰願依其誓願答此微功知足天之
雲上必遂上生内院之望鷄頭城之華下遂結下界值遇
之縁凡厥生々父母恩愛之類世々同法知識之輩俱蒙
大聖慈尊之引接同開中道唯識之惠解矣

右筆笠置寺住侶沙門宗性

読み下し文

文暦二年（一二三五年）二月八日酉時笠置寺東谷房に於いて之を抄し畢んぬ。

抑も宗性去る寛喜二年（一二三〇年）の秋、凶らずも此の靈地（笠置山）に参籠して以降、
深く慈尊の引接を馮み、偏に兜卒（現在弥勒は兜率天にて修行しているとされる）への往生を樂し
むの間、常に当山幽閑の居を卜し、専ら後世得脱の旨を祈る。

其中、去年青陽（春）の始め、当山居住の時、慙に經論、伝記、章疏の説を検訪し、弥
勒如来感応の文を抄出するの願を發す。

兼て祖師上人（解脱上人貞慶）御製作を以て本と為し、弥勒讚嘆の私記、兜卒業因（因縁）
の略抄等広く諸本を写し一帖に録せんと欲する処、同二月十四日の朝、悪党数輩一山に乱
入、房舎を破損し住侶を殺害し畢んぬ。

爰に宗性眼前に彼の悪行を見、懷中に此の双紙を持ち、先ず東山（ここには貞慶が修理の勸
進をおこなった東山觀音堂があった）に陵ぎ、暫く楊生（柳生のこと）の里に息み、後、南都に赴
きて再び華嚴の室（東大寺尊勝院）に還る。

其の後も当山稍静かならず、去年空しく之を過ぐ。而うして今器界（自然世界）漸く其の
本に復し、住侶多く此処に集うの間、重ねて慙懃（心をこめての）の誠を抽し、亦抄出の勤に
励む。今此の一帖を抄し結集を訖る所也。

此の中、觀兜卒記の外、皆是れ祖師上人の御草案也。拜見する毎に信仰の涙眼に浮かび、
誦誦する毎に隨喜の思い肝に銘ず。實に是れ末代の要書、後學の重宝なる者か。志の所、
之を集めざるべからず。

仰ぎ願はくは其の誓願に依り此の微功に答え、知足天（兜率天と同じ）の雲上、必ず上生内
院の望を遂げ、鷄頭城（ケートウマテイ、鷄頭末。弥勒下生の地。弥勒は鷄頭城に住む婆羅門夫婦を
両親に選んで出現するとされる）の華下、遂に下界（弥勒の下生）に値遇の縁を結び、凡そ厥れ生々
の父母恩愛の類、世々の同法知識の輩、俱に大聖慈尊の引接を蒙り、同じく中道唯識の惠
解を開かんことを。

右筆笠置寺住侶沙門宗性

弥勒如来感応抄第二奥書

原文

文曆二年二月七日酉時於笠置寺東谷房抄之畢

抑宗性自去寛喜二年之秋不図參籠此靈地以降深馮
慈尊之引接偏樂兜卒之往生之間常卜当山幽閑之居
專祈後世得脱之旨其中去年青陽之始当山居住之時
慙發檢訪經論伝記章疏之説抄出弥勒如来感応之文
之願即以当山護法所經藏之本並本寺尊勝院相承之
書於弥勒堂交合彼經藏唐本先諸伝記中撰出其要文
今一帖抄欲終其功之処同二月十四日之朝惡党数輩
乱入一山破損房舎殺害住侶畢爰宗性眼前見彼惡行
懷中持此双紙先陵東山尋路於楊生之風後赴南都留
跡於草庵之露其後当山稍不静去年空過之而今器界
漸復其本住侶亦集此処之間再抽慙懃之誠重勵抄出
之勤今此一帖抄所結集訖也仰願依其誓願答此微功
一期終焉之暮早遂兜卒往生之望三會説法之朝必預
慈尊引接之益凡厥生々父母恩愛之類世々同法知識
之輩俱洗罪垢於普賢願海之浪同開惠解於弥勒下生
之月矣

右筆笠置寺住侶沙門宗性

読み下し文

文曆二年（一二三五年）二月七日酉時、笠置寺東谷房に於いて之を抄し畢んぬ。

抑も宗性去る寛喜二年（一二三〇年）の秋、図らずも此の靈地に參籠して以降、深く慈尊の引接を馮み、偏に兜卒の往生を楽しむの間、常に当山幽閑の居を卜し、専ら後世得脱の旨を祈る。

其の中、去年青陽（春）の始め、当山居住の時、慙に經論、伝記、章疏の説を檢訪し、弥勒如来感応の文を抄出するの願を發す。

即ち当山（笠置寺）護法所經藏の本並びに本寺（東大寺）尊勝院相承の書を以て弥勒堂に於いて彼の經藏の唐本を交合し、先ず諸伝記中、其の要文を撰出、今一帖を抄し、其の功を終えんと欲するの処、同二月十四日の朝、惡党数輩一山に乱入、房舎を破損し住侶を殺害し畢んぬ。

爰に宗性、眼前に彼の惡行を見、懷中に此の双紙を持ち、先ず東山に陵ぎ、路を楊生の風に尋ね、後、南都に赴き跡を草庵の露に留む。

其の後、当山稍静かならずして去年空しく之を過ぐ。今器界漸く其の本に復し、住侶亦此の処に集うの間、再び慇懃の誠を抽し、重ねて抄出の勤に励み、今此の一帖を抄し、結集を乞ふ所也。

仰ぎ願はくは其の誓願に依り此の微功に答え、一期終焉の暮、早く兜卒往生の望みを遂げ、三会説法の朝、必ず慈尊引接の益に預かり、凡そ厥れ生々の父母恩愛の類、世々の同法知識の輩、俱に罪垢を普賢願海の浪に洗い、同じく恵解を弥勒下生の月に開かれんことを。

右筆笠置寺住侶沙門宗性

弥勒如来感応抄第三奥書

原文

文暦二年二月之比於笠置寺東谷房始抄之嘉禎三年

三月晦日午時於同寺福城院南堂此一帖終其功焉

随伝記之感得忘前後而書之暗文章之起尽乱上下而抄之非只恥當時之嘲定亦招後昆之謗者歟然而且為勸人入欣求兜卒之門且為勵自結值遇弥勒之縁時々專此勤年々運其志大聖慈尊哀愍納受春日権現知見証明兜卒天_之秋暮必導魂於内院之雲龍華樹之春朝再伴影於閻浮之霞乃至過去多生恩愛知識之類現在暫時同法善友之輩同依其一縁之不朽共預彼三会之引撰矣

右筆笠置寺住侶沙門宗性

読み下し文

文暦二年（一二三五年）二月の比、笠置寺東谷房に於いて始めて之を抄す。

嘉禎三年（一二三七年）三月晦日午時、同寺福城院南堂に於いて此の一帖にて其の功を終えるなり。伝記の感得に随い前後を忘れ之を書し、文章の起尽に暗く上下に乱れて之を抄す。只当時（現在）の嘲りを恥じ、定めて亦後昆（昆後、後世）の謗りを招くものにあらざるか。

然して且つは人をして欣求兜卒の門に入るを勧めんが為に、且つは自らをして弥勒值遇の縁を結ぶを励まさんが為、時々此の勤を専らにし、年々其の志を運ばんとす。

大聖慈尊哀愍納受し、春日権現知見証明され、兜卒天の秋暮、必ず魂を内院の雲に導びき、龍華樹の春朝、再び影を閻浮の霞に伴なわれんことを。乃至過去多生の恩愛知識の類、現在暫時の同法善友の輩、同じく其一縁の不朽に依り、共に彼の三会の引撰に預からんことを。

弥勒如来感応抄第四奥書

原文

文曆二年二月之比於笠置寺東谷房始抄之其後年々
參籠此処連々雖抄其文諸家之伝記尋訪不輒当山之
居住乍思亦希之間已雖經數年未類聚一部而今寛元
元初之天暮春々帰之候且悲余算之已迫且歎此勤之
未終再參籠当山重相励其勤書入清涼伝広清涼伝並
心性罪福因縁集之要文之次結集類聚以為一帖畢凡
前後合論今当第四帖是惣号弥勒如来感応抄矣仰願
大聖慈尊伏乞護法善神知見此深志哀愍此慙思上天
秋暮垂引接於内院之雲下生春朝施濟度於龍華之風
凡厥前世今生父母恩愛之類現在暫時同法善友之輩
同依其一縁之不朽共預彼三會之引接而已

于時寛元々々年三月二十日^{午時}於笠置寺福城院南堂之
北近隣晴玄法師之新房右筆記之

華嚴宗末葉権律師宗性

年齢 四十二

夏臈 三十廻

読み下し文

文曆二年（一二三五年）二月の比、笠置寺東谷房に於いて始めて之を抄す。

其の後年々此の処に參籠し連々其の文を抄すと雖も、諸家の伝記の尋訪輒すからず。当山の居住思ひ乍ら亦之を希うの間、已に數年を経ると雖も未だ類聚一部のみ。而して今寛元元初の天、暮春々帰の候、且つは余算の已に迫るを悲しみ、且つは此の勤の未だ終わらざるを歎き、再び当山に參籠し重ねて其の勤に相い励む。清涼伝を書き入れ、広く清涼伝並びに心性罪福因縁集の要文の次ぎ、類聚を結集し、以て一帖と為し畢んぬ。凡そ前後合論し、今当に第四帖とし、是れ惣じて弥勒如来感応抄と号す。

仰ぎては大聖慈尊に願ひ、伏しては護法善神に乞う。此の深志を知見、此の慙思を哀愍し、上天の秋暮、引接を内院の雲に垂れ、下生の春朝、濟度（悟りの境地に導くこと）を龍華の風に施されんことを。

凡そ厥れ前世今生の父母恩愛の類、現在暫時の同法善友の輩、同じく其一縁の不朽に依り、共に彼の三會の引接に預からんことのみを。

時に寛元々々年（一二四三年）三月二十日午時、笠置寺福城院南堂の北近隣晴玄法師の新房に於いて右之を筆記す。

華嚴宗末葉權律師宗性

年 齡 四十二

夏 臈 三十廻

弥勒如来感応抄第五奥書

原文

文応元年^{庚申}五月十一日^{申時}於笠置寺般若院抄出之畢
自去文暦二年二月之比至于寛元々々暮春之候毎卜
当山寂寞之閑居斯抄弥勒感応之要文先後九廻之間
結集四帖双紙其後当山之參籠中絶伝記之被覽懈怠
而今六旬齡傾難期後年於笠置山之暁月一生殘迫深
懸願念於兜卒天之暮雲依之自去四月十五日移住此
幽閑聖跡先度不勘及之要処此間抄出亦為一帖始末
五箇帖号之弥勒如来感応抄令後代見此抄之人欲入
欣求兜卒之門加之十三重宝塔壇場励微力而加修復
三七日入堂參社扶老骨而致精誠仰願大聖慈尊知見
此深志伏乞春日權現哀愍此懇誠一期終焉之時必施
引撰於兜卒内院三会下生之砌早開惠解於唯識奥旨
重乞有縁無縁平等利益自他他界普皆廻向而已

右筆華嚴宗末葉法印權大僧都宗性

年 齡 五十九

夏 臈 四十七

読み下し文

文応元年（一二六〇年）庚申五月十一日申時、笠置寺般若院に於いて之を抄出し畢んぬ。
去る文暦二年（一二三五年）二月の比より、寛元々々（一二四三年）暮春（春の末）の候に至り、每当山寂寞（ひっそりとして物寂しい様）の閑居を卜し、斯に弥勒感応の要文を抄す。先後九廻の間、四帖の双紙を結集するも、その後当山參籠を中絶し、伝記の被覽を懈怠す。而して今六旬（六十才）の齡に傾き、後年笠置山の暁月に期し難し。一生の残り迫りて、深く願念を兜卒天の暮雲に懸け、之に依り去る四月十五日より住いを此の幽閑の聖跡に移し、先度（さきごろ）勘及せざる要処を此の間抄出し、亦一帖と為す。始末（始めから終わりまで）五箇帖、之を号して弥勒如来感応抄とす。後代、此の抄を見る人、欣求し兜卒の門に入るを欲せしむ。

之に加うるに十三重宝塔の壇場、微力を励して修復を加う。三七日（二十一日間）堂に入り社に参り、老骨を扶けて精誠を致す。

仰ぎ願うは大聖慈尊、此の深志を見見されんことを、伏して乞うは春日権現、此の懇誠を哀愍し、一期終焉の時、必ず引撰を兜卒の内院に施し、三会下生の砌、早く惠解を唯識の奥旨に開かれんことを。重ねて乞う、有縁無縁、平等利益、自界他界、普く皆廻向のみ。

右筆華嚴宗末葉法印権大僧都宗性

年齢 五十九

夏臘 四十七